

2026.1.10

No.249

編集・発行人 樋口みな子

E-mail: minginga@agate.plala.or.jp

URL: <http://www.minaginga.sakura.ne.jp/index.html>

ゆうちょ銀行から

(記号) 19710 (番号) 02218911

他銀行から

(店番) 978 (口座番号) 0221891

ヒグチミナコ (郵送料年間 2,000 円)



一市民として、軍拡ではなく平和を、 原発の再稼働は許さない、と声をあげたい

新年あけましておめでとうございます。

年末にドカ雪があり、その雪かきがとても大変でした。私自身が歳を重ねて以前のように動けないと実感しました。

一昨年元旦に能登半島地震があり 2 年になりました。2 年近くかかって 41,297 棟の公費解体が終わったと記事にありました。復興にはまだ遠く、多くの住民が不自由で不安な生活を強いられていることに胸が痛みます。

昨年 12 月 8 日深夜、青森東方沖地震では最大震度 6 強で、江別は震度 4 強で結構長い揺れに驚きました。「災害は忘れた頃に来る」と言われますが、今は稼働していない泊原発で大きな地震があったら周辺住民の避難は難しいと思います。現地に何度か行きましたが、道路は狭く、迂回道路も少なく安全に札幌方面に避難するのは厳しいと思いました。

2025 年 12 月 10 日、私は半年ぶりで「再稼働は許さない」「知事は道民の声を聞け」と道庁前の抗議集会に参加しました。帯広、苫小牧、長沼、小樽、札幌と 220 人が参加。道議会の傍聴は道庁ロビーで聞きました。鈴木直道知事は「再稼働に同意することに致しました」と述べ、啞然としました。毎日新聞で継続的に泊原発について地元関係者や住民に取材してきた片野裕之記者は、北海道電力泊原発再稼働は「人類が次世代半導体などの未来を追い求める象徴的な場となった北海道で責任と有限性は忘れ去られてしまった」と厳しく批判しました。(2025.12.31 毎日新聞)

1 月 3 日、南米ベネゼイラの首都カラカスで、トランプ大統領が軍事攻撃をしました。国際社会は絶対に許しません。どんな理由があろうとマドゥロ大統領を拘束することは主権侵害です。ジャーナリストの伊藤千尋さんの FB から引用します「貧富の差が大きいベネゼイラで 1999 年に大統領に就任したチャベスは社会を公平にしようと改革したそうです。その一つで、あらゆるスラムに診療所が作られました。医師はキューバ人で、キューバ政府が派遣しています。ベネズエラの石油とキューバの医療と、お互いに相手にないものを交換しているのです」。

高市総理が「台湾有事が日本における存立危機事態



12.10 道庁前で泊原発再稼働に反対するデモ

の可能性があると明言したことに、中国は日本との輸出入や、日本への渡航を制限しました。日本への侵攻もありうるのではないかと、不安を募らせています。総理の暴言は、一刻も早く撤回していただきたい。

被爆を体験した日本。戦争は二度とあってはならないと思います。軍事費にけるお金を医療や、福祉、教育、市民の暮らしに使ってほしい。一人の声は小さいけれど、「戦争ではなく平和を」と訴えたいと思います。(樋口みな子)



1.1 斜里岳の初日の出 (撮影: 網走市・ゴッチさん)

朝鮮学校で学ぶ子ども達に心を寄せて下さる皆様のご協力で

北海道朝鮮初中高級学校に「平和友好米」をお届け出来ました 福原 正和

皆様のご協力で、10月24日第50回「平和友好米」(ゆめぴりか)500キロ・ジャガイモ・玉葱・カボチャと薩摩芋(井上真智子さん提供)それと体育館舞台設備のための50万円(別に学校へ直接郵送35,000円)を、北海道朝鮮初中高級学校に無事にお届けする事が出来ました。募金にご協力頂いた80余名、当日参加の23名の皆様に心より感謝申し上げます、ありがとうございました。

札幌は朝から雨模様でしたが、雨がやんだところに丁度長沼町から生産農家藪田さんのトラックが到着し「平和友好米」500キロは、生徒全員で体育館に運び込まれました。小さな生徒さんは10キロの袋を落としそうになりながらも頑張って持ち、皆笑顔で机の上に高く積み上げることが出来ました。

生徒さんたちの踊りと合奏・全員の合唱のあと、「平和友好米」を前に生徒さん代表からお礼の言葉の後、花束と色紙が長沼藪田享さんと事務局福原正和に渡されました。

昨年車イスで参加された山本玉樹先生は今年入院中で参加できず、福原が山本先生の代理(の気持ち)で「生徒の皆さんのハラボジ、ホルモン達がどんなにか苦労してこの学校を作ったことを私は知っています。皆さんの笑顔を見たらその方達はどんなにか喜んでしょう」と山本先生がい

つも話す言葉を紹介。道新記事が事前に出され、例年より多くの方からの寄付により、お米代に加えて多くの寄付が集まったことが報告されました。その後藪田享さんから「妻の両親から戦前夕張から逃げてきた朝鮮の方を逃がしたこともあると聞いています。今年田植えに生徒さんが来て下さり感謝しています。朝鮮学校の皆さんの事を考え、これからも頑張って米作りを続けていきたいと思ひます」と挨拶がありました。

その後食堂で給食担当の方が作った生徒さんと同じ美味しいビビンバを皆で食べ、韓国出身の父母会の方の感謝の言葉や、「高校無償化除外反対毎週街頭宣伝」の紹介など参加者で楽しく交流しました。

皆様のご協力で「平和友好米」500キロと野菜・舞台設備代などを届ける事が出来ました事を改めて感謝いたします。11月1日現在60,300円の追加寄付などあり、来年への繰越金と致します。(最終会計については監査頂きます)

来年新たな気持ちで51回目を行う予定です。できましたらまたよろしくお願ひいたします。

北海道在日朝鮮人の人権を守る会 事務局

=写真提供 朝鮮学校



「スパイ防止法」策動を阻止しよう

宮澤・レーン・スパイ冤罪事件を繰返させてはならない 福島 清

「銀河通信」発行・編集長の樋口みな子さんと読者のみなさま。はじめまして。12年前の2013年1月、札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」を結成し、事務局を担当している福島清です。

ご承知のように、自民・維新連立高市政権は「スパイ防止法」制定を策動しています。この弾圧法制を阻止することが急務となっています。そのためにも戦前の「スパイ防止法」だった「軍機保護法」によって弾圧された「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を知って欲しいと思ひます。

日中戦争が熾烈になっていく中で、軍国政府は1937(昭和12)年に「軍機保護法」を改悪し、1941(昭和16)年12月8日、太平洋戦争開戦の日に北大関係者7人を検挙し

ました。「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」です。この日検挙された北大関係者は、北大工学部学生=宮澤弘幸、同大英語教師=ハロルド・レーン、同=ポーリン・レーン、北大工学部助手=渡邊勝平、会社員でレーン夫妻知己=丸山護、無職でレーン夫妻知己=黒岩喜久雄、元レーン家女中=石上茂子の7人でした。この7人は、「軍機保護法」が指摘するような探知・漏洩といったスパイ行為などまったくしていませんでした。

1939(昭和14)年、宮澤ら学生とレーン夫妻ら、英語、ドイツ語、フランス語などの教員たちは「心の会—ソシエ・デュ・クール」を結成して、先進文化と語学の実践修得を目指していました=次頁写真。宮澤は陸海軍の軍事演習にも

積極的に参加する「軍国青年」だったのです。

こうした北海道帝国大学が誇るべき教員・学生たちに襲い掛かったのが「軍機保護法」です。この法律改定の時、



議会には暗雲が垂れ込めていましたが、心ある議員たちは徹底的に抵抗し、法律の運

用に縛りをつける付帯決議を採択させました。しかしながらいったん成立した悪法は、そんな付帯決議など完全に無視して、無実の学生・教員らに襲いかかったのです。そして北大も弾圧された教員や学生を見捨てました。

宮澤・レーン・スパイ冤罪事件を振り返る時、国家権力の弾圧を容認する弾圧法制は、絶対に成立させてはならないのです。この視点から「スパイ防止法」策動を阻止する大切さを訴えたいと思います。

「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」については、以下をご覧ください。 <http://miyazawa-lane.com/index.html>

(東京立川市 misuzuya@jcom.zaq.ne.jp)

「遊」35周年祭～さっぽろフリーダムフェスタやります! みんな来てね!!!!

さっぽろ自由学校「遊」共同代表 雨宮 恭子

銀河通信の読者の皆さん、こんにちは!

さっぽろ自由学校「遊」という名前を聞いたことはありますか。「遊」は1990年「市民がつくる市民のためのオルタナティブ(もうひとつの)学びの場」として創られました。札幌市郊外のある塾のスペースを借りたスタートだったと聞きます。

「今の社会の現状を変えて行きたい。そのためにはまず学びの場を創ることが必要なのだ」という人々の熱い思いが集まったのでした。設立の年は英語と、あとは2~3本の講座があるだけでしたが、それから少しずつ実績を重ね、講座の数も増え専用の事務所や教室も持てるようになりました。2001年よりNPO法人になり、人権、平和、環境、開発、ジェンダー、多文化共生等の社会の様々な課題を学び合う場を市民に提供、年間300回前後の講座を開催、延べ3,000~4,000名が参加しています。

さて、そんな「遊」が今年で設立35周年を迎えます。当時20代の若者も今は立派な60代になりました。どちらかというとメンバーに高齢者の姿が目立つようにはなりませんが、最近はうれしいことに少しずつ若者の姿も見かけるようになりました。

さて「遊」では35周年を盛大に祝いこれからのつなげようということで一大イベント(!?)を行うことになりました。

時: 2026年2月1日(日) 10時~17時

所: 北海道クリスチャンセンター(北7西6)

<フェスタの内容紹介>

◆アイヌ民族についてのプログラム

○ドキュメンタリー映画「カムイチェブ〜サケ漁と先住権」(93分)の上映~昨年「どうすればよかったか?」でブ



レイクしたあの藤野知明監督の作品です。まだ北海道でもあまり上映されていないのでこの機会

にぜひご覧ください。13:00~14:50 予定 上映後のトークにもご期待を!→「アイヌ民族とサケ漁の権利をめぐる」14:50~15:20

○ステージ①「木の芽とアイヌ有志一同」によるパフォーマンス~原田公久枝さん、小沼紀子さん、川上恵さんのユニット「木の芽」他豊川容子さん等の出演もあります。アイヌ民族の歌・踊り・楽器演奏に関心のある人にとっては堪えられない魅力的なラインナップになっています。開設以来ずっとアイヌの講座をやり続けてきた「遊」ならではの企画です。共に歩んできた「遊」の35周年を祝って全道からアイヌの方たちが駆けつけてくれます。

その他にも、

○トーク①『戦後80年を問うー戦争のない平和な世界を目指して』10:15~11:00

○ステージ②「遊」35周年を祝うパフォーマンス~ミャンマー舞踊(民主化を求める在北海道ミャンマー人ユニット)、フラダンス(知的障害があるごきげんなフラダンスユニット)、「MAKANA」合唱(札幌教合唱サークル「睦」)、沖縄民謡(仲唐安哉:石垣島出身医師)等充実したプログラムです。

チケットは前売り1,500円、当日1,800円、25歳以下1,000円、中学生以下無料です。前売りチケットは「遊」事務所(南1西5 愛生館ビル5F)で購入できます。会員が持ち歩いております。また右のQRコードから前売り料金で予約もできます。

みなさん、どうぞご参加ください。

一緒に楽しみましょう! 楽しみながら明日の世界をみんなで思い描けたらいいですね。



原発ゼロを目指す超党派議員の会オンライン討論会 概要 (2025年12月4日 10:15~11:15)

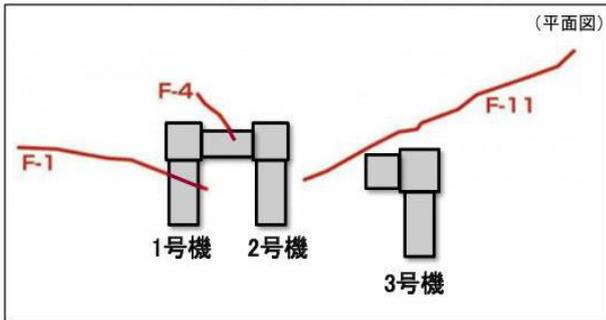
司会：阿部知子衆議院議員（立憲民主党）

○初めに小野有五北海道大学名誉教授から問題提起

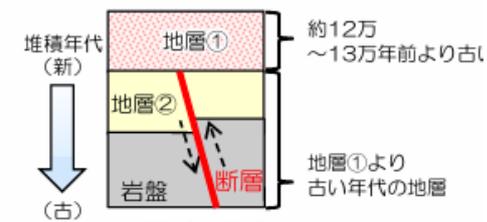
一、泊原発の敷地内断層について

F-1 断層の、北電が「地層境界」としたものは、本来存在しないので「上載地層法」を適用することはできず、F-1 断層は上方への延長が地層中でせん滅するので活断層を否定できない断層である。

活動性を評価するために選定した断層の位置



<活断層ではないケース>



断層が地層①に
変位・変形を与えていない
(地層①の基底面直下まで
変位・変形を与えている)

断層は地層①が堆積する前に活動

断層は約12万~13万年前より
“古い時代”に活動

<活断層の可能性を否定できないケース>



断層は地層①に変位・変形を与えていないが
下位の地層の途中で止まっている

断層の活動時期が推定できない
(断層は地層①が堆積する前に活動？
それとも堆積した後に活動？)

F-4, F-11 断層は断層露頭の科学的調査がなされず、離れた G 地点の地層との対比は、地質学的にも地形学的にも成り立たない。したがって、F-4, F-11 断層の上載地層は 12.5 万年前以降の堆積物

であることを否定できないので、「新規基準」による活断層を否定できない断層である。

二、北電の倫理性の問題について

幌似の火砕流堆積物についての北電の対応は、規制委を欺こうとするものである。F-1 断層でも意図的に「地層境界」を作り、規制委を欺いた北電は、不合格にすべきである。ここに述べた敷地内活断層の認定に関してだけでも、審査は不十分であり、規制委は審査をやり直すべきである。(以上約 30 分)

○次に原子力規制庁の佐藤氏と谷氏が小野質問に対応する形で討論に参加

小野氏の、北電の説明は科学的に事実を捻じ曲げたもので、規制委の審査をもう一度やり直すべきだということに対して、規制庁側はそれを認めず、あくまで北電の主張に沿ったものを認定するという態度であった。

だが、規制庁側は具体的な証拠を提示せず、曖昧で、論点ずらしやぼかしをするので、業を煮やした近藤昭一議員は、「明らかに（高さ）異なる G 地点をなだらかだというのは納得できない」と発言した。また、元東芝のプラント技術者の後藤政志氏は「最も基本的な部分で科学的論争がある（まま審査合格させた）のはおかしい。そんなことでは原子炉なんか建てられない」などと発言した。

しかし、それでも規制庁側は自分たちの判断に非があるということは認めず、「写真や図でそう見えることはあっても、現地で確認すれば必ずしもそうではないことも多々ある。我々としては現地を見て確認している」とあくまで規制委の審査の正しさを主張、議論がかみ合わない。

そこで司会の阿部知子氏から、「どういう議論でそういう結論になったのか資料を出して欲しい。勿論最終的に現地を見ることは重要だが、議論を尽くしたという内容がよく分からない。いくつかの懸念や指摘はある。それについての検証や資料を貰えればもう少し前向きな議論ができる」という提案があった。だが、規制庁（佐藤）は「審査会合での議論の結果が我々の最終結果として出てきている」とまた振出しに戻る。

阿部「例えば地質の専門家がどういう議論をしたのか、国民は知る権利がある。自主・民主・公開だ。納得できなきゃ（原発は）動かせない（筈だ）。資料を請求したい」というところで時間切れになった。当局がきちんと資料を出すかどうかは曖昧で微妙なままである。

まとめ文責：津田孝（脱原発苦小牧の会事務局長）

お薦め本 (樋口みな子)

シリアの現代史を家族の物語として描く

シリアの家族

小松由佳著
集英社 2,420円



ドキュメンタリー写真家・小松由佳さんがシリア難民の妻として、母として、翻弄される人々の日々を描いた『シリアの家族』が第23回開高健ノンフィクション賞を受賞しました。写真家としての鋭い視点と、家族の一員としての切実な体験が交錯する本作は、単なるルポルタージュを超え、現代史の証言として大きな意味を持つ一冊です。

2011年、民主化運動の拡大とアサド政権の武力弾圧によりシリアは内戦に突入。国民の4人に1人が難民となり、数百万人が国外へ逃れました。政権は徹底した恐怖政治を敷き、サイドナヤ刑務所ではむごたらしい弾圧の末に多くの人が殺害され、沈黙を強いられました。しかし日本で暮らしていると、シリアの人々がどのように生き、どのように苦しみ、どのように希望をつないできたのかが伝わってこない。小松さんは「難民の夫を持つ私が目撃したたくさんの方の物語を、多くの人に知ってほしい」と執筆を決意します。

夫のラドワンさんは、シリア中部バルミラの出身。半放牧的な生活を送り、十二人兄弟の末っ子として育ちました。徴兵され政府軍に入隊しますが、やがて脱走兵となり、空爆にさらされる中で一家はトルコへ逃れ難民となります。小松さんはその家族の一員として、難民生活の現実を体験しながら記録を続けました。

2022年、義父の死をきっかけにバルミラへの取材を敢行。秘密警察の監視下で自由に街を歩けない状況でも、親族の助けを得ながら取材を続けます。そして2024年12月8日、半世紀以上続いたアサド政権が突如崩壊。夫とともに政権崩壊直後のシリアを目撃し、予想もなかった歴史の転換点に立ち会うこととなりました。抑圧から解放された市民の表情、街の変化を記録しながら、筆を進めたのが本書です。

著者にも挑戦の歴史があります。2006年、日本人女性として初めて世界第2の高峰K2に登頂成功した経験は、極限の環境で生き抜く力を培いました。山で培った体験は、困難に直面したときにどう打開すべきかを教えてくれるものだったのでしょう。その精神力が、戦火のシリアに身を置き、恐怖や抑圧の中でも取材を続ける原動力となりました。

本書は、戦争や難民問題を「遠い国の出来事」としてではなく、家族の物語として身近に感じさせてくれます。シリアの人々の生きる力、困難の中でも失われない尊厳を描き出すことで、私たちに「人間とは何か」を問いかけます。

山で培った体験が、困難なときにどう打開すべきかを教えてくれたようです。著者はその力をもって、戦火のただ中に身を置きながらも筆を進めました。シリアの現代史を家族の物語として描き出すことで、私たちに深い問いを投げかけています。

詩と歌がつなぐ島の記憶

あなたがたの島へ

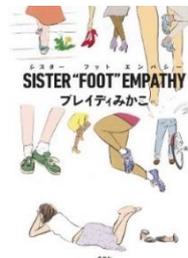
沢知恵著
岩波書店 2,420円



本書は沢知恵さんの生い立ちとシンガーソングライターとして生きてきた自伝的エッセイです。日本人の父と韓国人の母との間に生まれ、国立ハンセン病療養所「大島青松園」と深くかかわってきました。沢さんの父は牧師でした。

沢さんは幼い頃に父に連れられて国立ハンセン病療養所「大島青松園」を訪ねたことがあります。その後東京芸大在学中の1991年に歌手デビュー。96年に同園を訪問して以来、今日まで同園の入所者たちと交流を続けてきました。沢さんはハンセン病の歴史や、園歌に関心を持ち、岡山大学大学院に入り、全国各地の療養所を訪ね、歌われてきた「園歌」を研究しました。その成果は『うたに刻まれたハンセン病隔離の歴史』(岩波ブックレット)として2022年に出版されています。私も読みましたが、歌い継がれてきた歌の数々を掘り起こしたことに驚きました。沢さんは元患者の塔和子さんの詩に感銘を受けて、8編に曲をつけ、弾き語りでも語り継いでいます。私も塔さんの詩が好きです。

私は「ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会」の会員で、ハンセン病市民学会で「大島青松園」を訪ねたことがあります。どこも高齢化が進み入所者数は、全国の療養所でも減少しています。今、大きな課題になっているのが、療養所が存続できるかということです。療養所は無くしてはならないと思います。記憶の継承を願っています。



地べたに立つシスターフッド

SISTER "FOOT" EMPATHY

ブレンディみかこ著
集英社 1,760円

シスターフッド(女性同士の連帯)からFOOT(足もと)「地べた」という言葉もよく使われていて、ブレンディさんは何かと「足もと」にこだわりがあります。「他者の靴を履くアナキック・エンパシーのすすめ」とは、相手の視点に立って想像する知的な作業、多様な価値観がぶつかる現代社会で衝突を避けより良い関係を築くための重要な能力(エンパシー)として、アナキズムと結びつけて提唱されています。

シスターフッドは女性たちの連帯を指す言葉ですが、特別な運動をしている人だけじゃなく、どこにでもいる市井の女性たちのつながりを意味するとブレンディさんは語ります。

11月に観た『女性の休日』では、アイスランドの女性ストライキがどんな闘いだっただのかが語られます。アイスランドはジェンダーギャップランキングで、16年連続世界1位です。でも、かつては女性の地位は決して高くはありませんでした。男女の平等を訴えて女性たちが一斉にストライキを起こし、権利を勝ち取ったのです。バラバラに生きている女性たちが一丸となって何かできるのがシスターフッドかな

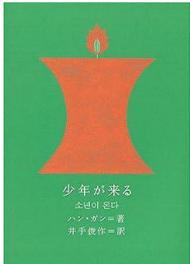
とも語っています。平等（対等）、自由、リスペクトを手にする為に手を組もう、女性たちよ！というシスターフッド論。

女性同士のつながりや友情というのがシスターフッドの本来の意味だから、たとえ階層や環境、人種が違って、「エンパシー」（他者への想像力）を使って「どうしてこのあたりが違うんだろう？」「でも、ここではつながれるよね」って広げていくことが、社会を変えていく力になると語ります。

コロナ禍以降の社会の動きを鋭く見つめ、これからの女性たちの生き方を考えた、前に進むための力が湧くエッセイ39編です。無駄に分断されず、共に地べたに足をつけてつながる。英国で暮らす中で著者が感じた様々な他者への想像、エンパシーが語られます。他者への想像は一つ一つの積み重ねだと思し、自分の世界はとても狭く限りがあるけれど、本や映画に触れることでエンパシーに近付ける気がする。

「赤い靴」の章「シンドラーのリスト」で、赤いコートの少女に目が離せなくなるシンドラーが描かれていました。ナチスを支持する立場から工場労働者の命を救うことになったきっかけが赤いコートだったのです。私もアウシュヴィッツ博物館で保存されていた、赤い靴を見ました。

フェミニズムより実践的なシスターフッドの概念を発展させた、シスターフッドエンパシーの概念にブレンディさんは辿り着きます。具体例としては韓国の4B運動の改良版とか、地域のコミュニティになる本屋を立ち上げるとか、参考になることってたくさんあると思いました。



光州事件を生きる声

少年が来る

ハン・ガン著 井出俊作訳

(2016年発行)クオン社 2,750円

2024年、韓国の作家ハン・ガンがノーベル文学賞を受賞し、大きな話題となりました。アジアからの初受賞です。

私はこれまで『タクシー運転手 約束は海を越えて』『ソ

映画の紹介



静かな旅が心を動かす

『旅と日々』

監督・脚本 三宅唱

原作・つげ義春の漫画『海辺の叙景』ほか

映画は都会の風景から始まります。その片隅で、脚本家の李（シム・ウンギョン）が必死に原稿を書いている。パソコンではなく、手書きのハングル文字。彼女が韓国から日本へやって来たことが、さりげなく伝わる導入です。

物語には大きな事件は起こりません。旅のエピソードが淡々と、しかし確かな手触りをもって綴られていきます。

後半では、スランプに陥った李が、べん造との距離の近い関係を通して、ゆっくりと変わっていく。李はモノローグで「日本に来た時の新鮮な感動がない」「言葉のオリの中にいる」と語り、自信を失っていることを明かします。しかし、べん造との交流を経て、最後には希望を宿した瞳で原稿に向き合う。劇的な再生ではないけれど、確かに前へ進む力が芽生えている。そのささやかな変化に、三宅監督

ウルノ春』『1980 僕たちの光州事件』といった作品を通じて光州事件を知りましたが、文学作品として光州事件を正面から描いたものは少なかったように思います。

光州で起きた学生・市民による民主化運動とそれを武力で弾圧した戒厳軍—いわゆる「光州事件」(光州民主化運動)は、戦後韓国の政治社会史の大きな転換点でした。ハン・ガンの小説『少年が来る』はこの事件を題材にしたノンフィクション的小説で、犠牲となった人々の無念、生き残った人々の傷を複数の視点から丹念に描いています。

詩人でもあるハン・ガンは、作中で「君は声に出してつぶやく。ほんとに雨が降ってきたらどうしよう」という印象的な一節があります。

物語の中心となるのは、中学3年生の少年キム・トンホです。彼をはじめ光州事件で命を落とした者たちの無念、そして生き残った者たちが抱える〈傷〉が、人称を切り替える独特の文体で描かれます。犠牲者の声を継ぎ、時代を超えて「どうか死なないでください」という祈りを伝える作品です。前半はトンホの死、後半は仲間や母の証言に続きます。

第一章「幼い鳥」で彼の行動が描かれ、第二章「黒い吐息」で彼の死が確定的に示されます。その後の章は、生き残った仲間や家族が彼の不在を抱えながら生きる物語です。

第六章「花が咲いているほうに」はトンホの母の視点で語られる30年後の物語。エピローグでは作者ハン・ガン自身と光州事件との深い関わりが明かされます。

『少年が来る』は1980年と現在の韓国をつなぐ通路であり、ハン・ガン自身の存在もまた、韓国の近代文学とポストモダン文学を結ぶ回路となっています。

訳者の井出俊作はあとがきで「戒厳令が5月27日に武力鎮圧するまでに多くの活動家や学生、市民が死傷した。この出来事は軍事独裁政権下の韓国社会が民主化へ向かう上で決定的な起爆剤となった」と記しています。

人間の絶望的な性質を知り尽くしながらも、なお書かずにはいられない—その切実さが『少年が来る』を普遍的な祈りの書とし、時代を超えて読み継がれる作品にしています。

(樋口みな子)

らしいまなざしを感じました。

同時に、本作は「旅」というものの本質を描いた映画でもあります。旅の途中で出会う見知らぬ人々、ふと心が動く瞬間、弱った心が少しずつ癒えていく過程。前半の夏の海や山の鮮やかな風景、後半の銀世界に佇む古びた宿、色鮮やかな錦鯉—どれも三宅監督らしい、静かで美しい映像です。

李を演じたシム・ウンギョンは「新聞記者」で存在感を示した俳優。ここでも繊細な演技が光ります。

べん造役の堤真一は、方言の味わいも相まって笑いを誘いながら、喪失を抱えた複雑な人物像を軽やかに演じていました。そして忘れてはならないのが河合優実。つげ漫画から抜け出してきたような佇まいで、やさぐれた雰囲気と内に秘めた悲しみ、そしてどこか妖艶な魅力を見事に体現していました。



戦後ローマに響く女性の声

『ドマーニ! 愛のことづて』

パオラ・コルテッレージ監督・主演

(2023年制作、2025年日本公開)

戦後の荒廃したローマで逞しく生きる人々と女性たちの生きづらさと希望を鮮烈に描き出した作品です。

モノクロ映像の選択は、1946年という時代の空気を観客に直に伝え、戦後の混乱と抑圧をより生々しく感じさせます。舞台はローマ。半地下



下の粗末なアパートに暮らすデリアは、夫ヴァーノから日常的に暴力を受けています。冒頭の目覚めのピンタは観客に衝撃を与えますが、同時に物語全体を貫く家父長制の象徴として機能しています。

しかし本作は単なる被害の記録にとどまりません。デリアの周囲には市場で働く友人マリーザや、彼女を慕う整備士ニーノといった人々が存在し、彼らとの交流が彼女の心を支えています。長女マルチェッラは母を理解せず、裕福な家の息子との結婚を控えています。その姿は世代間の断絶を示すと同時に、女性が置かれた社会的立場の複雑さを映し出しています。寝たきりの義父や家族の重圧に耐えるデリアの姿は、戦後日本の女性像とも重なり、観客に普遍的な問いを投げかけます。

コルテッレージの演出は、暴力と謝罪を「ダンス」として表現するなど、ユーモアを交えた独創性に満ちています。加害者と被害者が無意識にペアで踊る姿は、抑圧の構造を可視化しつつも、観客に笑いと苦味を同時に味わわせます。暗さに沈まず、ユーモラスに描くことで、作品は観る者を重苦しさから解放し、むしろ希望を感じさせます。

物語を大きく動かすのは、デリアに届く一通の謎めいた手紙です。決められた時間に行動できれば、彼女は負の連鎖から抜け出せるかもしれません。手紙は未来への扉であり、抑圧に抗う女性たちの象徴でもあります。娘がその手紙を拾い届ける場面、さらに「あなたは学びなさい」とへそくりを渡す場面は、母から娘へと受け継がれる希望のバトンを鮮やかに示して、とても印象的です。娘が、母の強さと優しさを受け止めるまなざしがとても素敵でした。

本作はイタリアで興行記録を塗り替える成功を収めました。そこには、戦後から現代に至るまで続く女性の闘いと連帯が観客の心を揺さぶった背景があります。デリアの姿は個人の物語であると同時に、社会全体の変革を象徴しています。暴力に耐え続けるのではなく、自らの権利を勝ち取り、次世代へとつなぐ女性たちの姿は、歴史的事実を超えて普遍的なメッセージを放っていました。戦後ローマの一家族を通じて、女性の尊厳と自由を描いた力強い映画です。コルテッレージの演技と演出は、抑圧の構造を暴きながらも、ユーモアと希望を忘れません。私はデリアの歩みに共鳴し、男女平等を勝ち取った歴史の重みを改めて感じました。(札幌映画サークル会報1月号に掲載)

休日を変えた世界

『女性の休日』

パメラ・ハウガン監督

アイスランドはジェンダーギャップ指数で連続1位を記録し、男女平等が世界一進んでいる国とされています。そこでは10月24日が「女性の休日」と定められています。50年前の1975年に国内の90%の女性が仕事や家事を一斉に休むムーブメントを決行。これがきっかけで翌年には男女の賃金格差を禁止する法律が制定されたり、スピーチを行った人たちが政治家になったりしています。

アメリカ人のパメラ・ホーガンは、アイスランド旅行中に偶然それを知り、詳しく調べたところ未だ映画化されていないことに気がつき、映画化を決意します。

50年前の「女性の休日」ムーブメントに関わった当事者たちにインタビューを重ね、さらに古い映像もかき集め、ドキュメンタリー映画『女性の休日』を完成させました。

なぜ女性は船長になれないの？なぜ女性は農場主になれないの？なぜ女性は家事のすべてを担うの？なぜ女性は男性より賃金が低いのか？

延々続いてきた男女の格差を解消するため、アメリカから始まった「レッドストッキング」と呼ばれるラディカルなフェミニズム運動が1970年代のアイスランドでも盛り上がったのです。

クリスマスに疲れた女性の人形をツリーにはりつけてみせたり、ミスコンの会場に雌牛を連れて行ったり、ラジオで生理やセックスについて語ってみたり。いわゆる世間が眉をひそめるような言動によって社会の当たり前に揺さぶりをかけようとしたのです。



ところが「ストライキ」という言葉を早々に捨て、みんなが100%で肯定せずとも、否定はしないで済む「休日」というオルタナティブな言葉で前進させたのでした。

映画『女性の休日』もドキュメンタリーながらアニメーションが多用されていて、その柔らかいタッチがいい味を出しています。軽やかさというか、柔軟さというか、そういうものを持ち続けなくては、社会は変えられないという当たり前とマッチしています。

アイスランドの「女性の休日」は社会を変えたいすべての人へのかけがえのないヒントがたくさん詰まっていた。そのヒントをどう生かすかは私たち次第です。

自由のために命がけて真実を伝えた ラジオ局員たち

『プラハの春 不屈のラジオ報道』

監督・脚本 イージー・マードル

国営ラジオの国際報道部長・ヴァイナーをはじめ、若い局員たちは、市民のために真実を伝えるという使命感に燃

えています。中央通信局で技術者として働くトマーシュは、国営ラジオ国際報道部への転勤を命じられますが、それは報道部の動きを密告するためでした。背けば、学生運動に関わる弟パーヤの命が危ないと国家保安部に脅されているのです。しかし、ヴァイナーや仲間たちが命を賭けて真実を伝えようとする姿を目の当たりにし、トマーシュは次第に“ただの監視役”ではいられなくなっていく。

トマーシュを演じるボイチェフ・ボドホツキーの繊細な演技は、裏切り者としての重圧と報道部員としての誇りの間で揺れる複雑な心情を見事に表現しています。また、トマーシュと恋仲になるヴェラの、どんな状況でも揺るがない勇気にも胸を打たれました。

ロシアがウクライナに侵攻して4年目。いまだに解決の見通しが立たない今、この作品を観ることは特別な意味があるように感じました。昨日までの自由が突然奪われることへの怒りを「プラハの春」の経験が語りかけます。

1968年、旧ソ連の支配に抗してチェコスロバキアで起こった「プラハの春」は、社会主義体制下で言論や表現の自由を求めた民主化運動として世界的に知られる歴史的事件です。映画では、この運動の中で国家の検閲に抗い、真実を伝え続けた国営ラジオ局の報道部員たちの姿が描かれます。彼らは銃や暴力ではなく、“声”によって抵抗するので。戦車に囲まれても、命がけて報道を続けました。

これは単なる歴史の再現ではなく、現在の世界情勢とも重なる映画です。最終的に他国の介入により運動は抑圧されますが、この出来事が後の東欧の民主化運動やソ連崩壊につながったことを知りました。実在の人物名が登場し、当時の映像も多数使われていて非常にリアルです。私たちの自由が不変であり続けられるのか、大きな力にいつの間にか従わされてはいないだろうか、と考えさせられました。

局内では米国のポップスがレコードで堂々と流れ、享乐的な空気さえ漂う一方、厳しい検閲要求もあり緊張感が入り混じります。半年ほど続いた「プラハの春」の終焉から、映画は一気に緊迫感を帯び、悲劇へと突入します。ソ連軍がチェコスロバキアに侵攻し、ラジオ局を制圧。しかし報道局員たちは権力と戦車に立ち向かい、トマーシュは技術者として回線をつなげ、報道局員は局外から真実の報道を続け、市民を励まし続けたのです。

日本は権力を監視する報道をしているか、と問われていると思いました。

信仰と正義に生きた神学者の肖像

『ボンヘッファー ヒトラーを暗殺しようとした牧師』

トッド・コマーニキ監督・脚本

20世紀を代表するキリスト教神学者のひとりと呼ばれるボンヘッファーの知られざる人物像を描いた作品です。

第二次世界大戦下、ナチス・ドイツがユダヤ人迫害と教会弾圧を強める中、権力に従属しヒトラーを神格化するドイツ帝国教会に対し、ボンヘッファーは毅然と反対の声を上げます。「悪の前の沈黙は悪である」という彼の信念は、信仰に基づく倫理的責任を象徴しています。

家族思いで敬虔な青年だった彼は、やがてヒトラーを人類への脅威と捉え、レジスタンスの一員として活動を深めていきます。スパイとして暗躍し、仲間とともに暗殺計画に関わる姿には、信仰と倫理の狭間で葛藤しながらも、真のキリスト者としての生き方を模索する人間像が浮かび上がります。命を懸けて正義を貫こうとするその姿勢は、観る者に強い勇気を与えます。

特に心に残るのは、処刑を待つ人々に聖体拝領を授ける場面です。ボンヘッファーの揺るぎない矜持と、受ける側の静かな信頼が交差し、人間の尊厳と信仰の力が深く伝わってきます。キリスト教の核心が凝縮されたような瞬間で、深い余韻を残します。

本作は、歴史の陰で信仰を貫いた一人の神学者の闘いを通して、宗教と政治、信念と権力の関係を問い直します。クリスチャン歴3年の私にとっても、知らなかった歴史に触れる貴重な機会となり、ボンヘッファーの温かな人間性に触れることで信仰への理解が一層深まりました。前教皇フランシスコの青年時代を描いた映画を観たときと同じように、宗教者の人間的魅力に心を動かされました。

『ボンヘッファー』は、信仰に従い正義を生き抜いた一人の牧師の現代にも通じる普遍的な問いを投げかける作品です。観終えた後、胸に沁みる感動とともに、信仰と人間の尊厳について深く考えさせられました。

昭和を超えて、いまを生きるすみれの旅

『TOKYO タクシー』

山田洋次監督

物語は、タクシー運転手・宇佐美（木村拓哉）と、85歳の女性・すみれ（倍賞千恵子）の二人だけによる会話劇。舞台はほぼ車内のみ。それなのに、観客はまるで東京の街を一緒に走っているような臨場感に包まれます。11月でしたが、冷たい風の中でふと立ち止まりたくなるような、そんな余韻を残してくれました。山田洋次監督の人間の営みを丁寧にすくい上げる手腕が光ります。原作はフランス映画『パリタクシー』（2023年）。文化も背景も異なる物語を、日本の風土と昭和の記憶に見事に置き換えています。

すみれを演じる倍賞千恵子は、気品と強さを併せ持つ“マダム”の風情。指先のネイルまで美しく整えられ、年齢を重ねた女性の凛とした佇まいがスクリーンから伝わってきます。江戸っ子らしい歯切れのよい物言いは小気味よく、寅さん映画の「さくら」とはまったく異なる人生を歩んできた女性像を鮮やかに体現しています。

すみれの語る過去は、少しずつ、まるで大切な箱を開けるように明かされていきます。そのたびに挿入されるフラッシュバックが、彼女の人生の重みを静かに伝えます。東京大空襲、北朝鮮帰国事業、家庭内暴力、男尊女卑—どれも昭和という時代を象徴する出来事ばかり。すみれはその荒波の中を、自分の意志で、時に傷つきながらも前へ進んできた女性です。

そんな彼女の語りに宇佐美は決して口を挟まず、ただ静かに耳を傾けます。木村拓哉の控えめな演技が素晴らしく、相手の人生を尊重し寄り添おうとする姿勢が自然に滲み出ています。派手さはないのに深い実感がこもっていて、観



ているこちらまで心が温かくなります。

撮影方法も興味深いものです。柴又を出発し、神奈川・葉山まで向かう道のりを、巨大で精緻なLEDスクリーンを背景にスタジオで撮影したとのこと。アングルを変えても違和感がまったくなく、むしろ自由度が高く、リアルな映像に驚かされます。監督も主演も高齢になった今、こうした技術が作品の可能性を広げているのだと感じました。

タクシーという密室で、たった二人の会話だけで、これほど豊かな物語が生まれるとは。もっともっと、このタクシーに乗ってみたい、そんな気持ちにさせてくれる映画です。

銀河通信 248号への感想やおたより

「幸せの国」を希求する、韓国の大統領暗殺を描いた映画評と光州のルポが掲載されていましたが、思ったのは韓国人々がそれぞれ国の未来を考え、行動を起こしたということです。光州事件の時に集まった市民は、軍の圧政に反抗し、国の未来のために立ち上がりました。その彼ら彼女らが軍隊と対峙したときに自然に沸き起こったのは国歌「愛国歌」の大合唱でした。その合唱に向けて、軍は発砲したわけです。私たちは今、社会の在り方に疑問を感じてデモに参加した時、国歌を高らかに歌うだろうか。自分の国を愛するのであれば今やらなければならないことがある。でも国を愛するということが権力に捻じ曲げられて強要されているのが現状ではないか。組曲「無言館」に収録された最後の曲は「今」。門倉さとしの歌詞は「いまわたしはなににむきあっているか、ひたむきに時代とむきあって生きているか、ひたむきに自分とむきあって生きているか、いまわたしはなににむきあっているか」。戦没学生の前についた詩人からほとぼり出た歌詞と思っています。

(神奈川県大磯町・石川旺さん)

素敵で、その上励まされる内容いっぱいです。間もなく冬。どうかご元気でさらなるご活躍を

(東京都立川市・福島清さん)

私もチェルノブイリの原発事故の時、娘の離乳食を作っていた頃で衝撃を受けました。また、『宝島』の映画評は、残念ながら観れなかった私にとって、深い意味を教えてくださいました。

(大阪市・堀和江さん)

銀河通信を一気に読ませていただきました。公文さんの活動はNHKの番組でも見ていました。どのような子供や人間の成長の場面に出会える感動は心が震えます。その成長の保障を誰でも受けられ事を願っています。そしてハン・ガンの小説と訳者の斎藤真理子さんの文書にジェノサイドのあり様に権力者のしてきた事にショックを受けました。

今、私は濟州島のジェノサイドの有り様を描いた『別れを告げない』を読んでいきます。また韓国文学にあることを読んで、韓国文学から生きることの悩み苦しき、自立を考えさせられます。みな子さんが様々な悩みと努力の中で作成している通信は深みを増していますね。

(江別市・但馬桂子さん)

お薦めの本のコーナーで拙著『最後の証言者たち』をご

紹介下さり本当にありがとうございました。著者として嬉しかったのは樋口さんが丁寧に最後まで読んで下さり、そのうえ、分かりやすい文章で、的確な感想を寄せられていたことでした。重いテーマですので、一気に読み通すことができない内容で、読了ご苦労様でした。

拙著の紹介と同時に殿平さんの『和解と平和の森』も掲載されていて驚きました。殿平さんとは中国奥地への旅で一緒したことがあり、偶然とは言え、殿平さんの著書と同時に紹介されたことも何かの縁だと思いました「銀河通信」のますますの発展を陰ながら祈っています。

(静岡県南伊豆町・澤田猛さん)

圧倒される内容に感動しました。人道的活動のあれこれ、著書と映画の鋭い考察。それを伝え、紹介する文章力に頭が下がります。全国的な関心事、熊対策が掲載されているのが着目されます。朝日と月と季節感と、写真が目を楽しませてくれます。すてきな通信をありがとうございます。

(調布市・鈴木陽子さん)

ネット上で受けとっているのですが、拙著を紹介して下さったので郵送して下さったのでしょうか。大切にストックします。ありがとうございます。22日に出版集会があります。オンラインでも可能です。朱鞠内でお会いできる日がありますことを。

(深川市・殿平善彦さん)

物価高など、毎日大変な日々が続いており、「銀河通信」発行にご苦労されておられる事がひしひしと伝わってきます。寄付させていただきました。無理なさらずに続けていただきたいと思っています。(名古屋市・小川信之さん)

銀河通信はいつも楽しみにして読ませていただいております。大変でしょうが頑張ってもう少し続けてください。こんな形でしか応援できませんが、今後ともサポーターとして応援させていただきます。(札幌市・大橋晃さん)

みな子さんの活躍を陰ながら応援してきました。お送りしたのはこれまで未払いの購読料とカンパですが、銀河通信の継続のために少しでもお役に立てるなら喜びとするところです。銀河通信は一市民の立場からこの時代をつづった貴重な記録です。大手メディアには到底できない記録であり、後世に伝えるべき同時代史です。みな子さんのこれまでのあゆみに敬意を表するとともにこれから期待しています。(広島市・澤田正さん)

Happy New Year 2026!

今年は少し旧約聖書を読みたいと思っています。現在に通じることが、かえって新約聖書より多いと感じるからです。

レオンは、サンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼の道の途中にある、スペイン中部の小さな町です。右の絵の背後にそびえる大きなカテドラルと、スケッチした壁画のある聖イシドロー教会で有名です。壁画は12世紀のフレスコ画で、撮影禁止のため、ガイドされているわずかな時間に大急ぎでスケッチしたので、イエスさまのご降誕の馬小屋も、一部しか描けませんでした。天使や、動物たちが、かわいらしかったです。もう12年も前のことになりましたが、いちばん心に残る巡礼の旅でした。(札幌市・小野有五さん)



ヒマラヤの集い〜堀泰雄さんからのご招待

2026年2月26日〜3月8日、ネパールで開催される第15回ヒマラヤの集いのパンフレットをお届けできることを大変嬉しく思います。

今回は、参加者の皆様をネパールで最も美しい場所の一つ、世界的に有名なランタンへお連れする予定です。期間中は、様々なエスペラント語プログラムが開催され、参加者の皆様の人生経験を豊かにするとともに、地域活動の活性化にも貢献します。

ヒマラヤの集いは、文化プログラム、国際交流、そしてユニークな自然体験を組み合わせた、あらゆる年齢層の方々にお楽しみいただけるイベントです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。ネパールのエスペラント語話者の方々にもぜひご参加いただきたいと思います。

詳細は：<https://eventaservo.org/e/a22e96>
お問合せは：nespa.1990@gmail.com

寄付と購読料をありがとうございます。(敬称略)

波留美子 清水俊子 井上昌和・浅川身奈栄 三露久男
吉田真由美 赤坂京子 小川信之 澤耕司 斎木登茂子
福島清 岡本恵子 大橋晃 石川旺 奥田聡 高橋雋 反橋一夫
塩川哲男 津田孝 福原正和 川原茂雄 寺島一男 佐竹政治
二通聡 高橋政春 澤田正 佐藤毅 松浦幸子 高橋春枝
鈴木陽子 藤田とし子 二階堂初代 但馬桂子 中谷勉 宮本紀子 沖山美喜子 黒田忠
合計 421,000 円

今年の通信を発行するのが厳しい状況で、今回初めてWEB 読者にカンパをお願いしました。印刷通信読者も含めて36人からカンパが多数寄せられました。今年1年間は安心して発行することができます。この場を借りてお礼を申し上げます。今後も応援をお願いします。(樋口みな子)

振込はゆうちょ銀行から(記号)19710(番号)02218911
他銀行からは(店番)978(口座番号)0221891
ヒグチミナコ宛をお願いします。



大通公園のヤマガラ
さえずりはツツピー
ツツピーツツ
とスローテンポで歌います
2026.1.2



雪かきをしているときは
恨めしく思うのに、美しい雪と
夕焼けに心が安らぎました
2026.1.9
(撮影 樋口みな子)

銀河通信 249号 目次

一市民として、軍拡ではなく平和を、原発の再稼働は許さない、と声をあげたい(樋口みな子).....	1
朝鮮学校で学ぶ子ども達に心を寄せて下さる皆様のご協力で北海道朝鮮初中高級学校に「平和友好米」をお届け 出来ました(福原正和) /	
「スパイ防止法」策動を阻止しよう 宮澤・レーン・スパイ冤罪事件を繰返させてはならない(福島清).....	2
「遊」35周年祭〜さっぽろフリーダムフェスタやります! みんな来てね!!! (雨宮恭子).....	3
原発ゼロを目指す超党派議員の会オンライン討論会 概要(津田孝).....	4
お薦め本『シリアの家族』/『あなたがたの島へ!』/『SISTER "FOOT" EMPATHY』/.....	5
『少年が来る』(樋口みな子) /映画の紹介『旅と日々』/.....	6
『ドマーニ! 愛のことづて』/『女性の休日』/『プラハの春 不屈のラジオ報道』.....	7
『ボンヘッファー ヒトラーを暗殺しようとした牧師』/『TOKYO タクシー』(樋口みな子).....	8
銀河通信 248号への感想やおたより.....	9
Happy New Year 2026! (小野有五) /ヒマラヤの集い〜堀泰雄さんからのご招待/ 寄付と購読料をありがとうございます.....	10